

# 勝林寺月報

二号

よき細工は

少し鈍き刀を使うという

妙観が刀は

いたくたたず。



「徒然草」(つれづれぐさ)という本に出ていることばです。

ほんものの細工師(彫刻家)は、決して切れ味のよい鋭い刀は使わないものだ。案外すこしがい深い刀を使つていい。妙観という彫刻の名人がいるが、その人の刀は、そんなに切れ味のいいものではない。

「われこそは」といううねぼれた心を内にもつていて、人のことをズバズバ批判非難する人がいます。

相手に少々間違いがあつても、一応その人の言い分に耳をかたむけ、その人の立場を思いやつてあげられるだけの「ゆとり」がほしいものです。その「ゆとり」がほんとの賢しさであります。

孔子さまは、「ほんとのかしこいお年寄りといふのは、「耳順がう」(人の言い分を、すなおに聞くことのできる耳をもつた)老人のことをいうのだとおつしやっています。

「アソビ」のないハンドルは、かえつて危険なのだそうです。

完璧主義の人があります。  
一から十まで、一つのオチもないよう気に配り処置をして、だれからも指一本さよせないよう、「武装」している人があります。

偉い人だと思います。

文句のつけようのない人だと思います。  
がしかし、このような人が、自分のその完璧の中に孤高をきめこんで、「人のことはわしや知らぬ」という態度になつたり、また自分の完璧さをタテにして、人のしていることを冷たい目でせせら笑つたりするようになれば、これは困りものです。

「一本ねけた」・「少しにふい」ところのある人が人間的ではないでしょうか。  
自分に欠陥・自分の弱さを知つている人の方があたよかいのです。

人と人とのつき合いは、優しさや強さや美しさを互いにぶつつけ合つたのでは、とげとげしいものになつてしまします。  
そうではなくて、弱いもの・一本ねけたものが、互に欠陥や弱さを認めあいながらつき合つたら、あたたかな人間関係がうまれてくるのです。

今のは、「からす、なぜ暗くの、からすのかつてでしょ」とうたいます。

恵まれ過ぎたなかで育つて苦しさも悲しさも知らない今の子供。「偉くなりなさい。強くなりなさい。賢くなりなさい」という教育のなかで、人間にもつてゐる悲しさや弱さを全く教えられない今の子供は、余りにも賢くなり過ぎて、「からす」の勝手だ、人のことなんか知るものかと、冷たくはねつてしまふのです。

たくさんの子を育てた母親。またその母親の苦労や悲しみを見て育つてきた子供なら、からすの子育てのなかで鳴く声にも、その苦労をいやつてやれますし、その苦労の中で育てられている山の古巣の七つの子のかわい

さを感じられてくるのです。

賢くなれ、偉くなれ、強くなれという教育も必要でしようが、自分という人間の、弱さ、もろさ、あさましさを知る教育が大切です。

「いつでもどこでも照してくださるほとけ様」「いつでもどこでも呼んでくださるほとけ様」といわれる南無阿弥陀仏の、光明と名号とは、いつのまにか必ず、私の心中に孤高をきめこんで、「人のことはわしや知らぬ」という態度になつたり、また自分の完璧さをタテにして、人のしていることを冷たい目でせせら笑つたりするようになれば、これは困りものです。

「一本ねけた」・「少しにふい」ところのある人が人間的ではないでしょうか。  
自分に欠陥・自分の弱さを認める人のことをもつている同志が、互に欠陥や弱さを認めあいながらつき合つたら、あたたかな人間関係がうまれてくるのです。

一日に一度座るお仏壇の前で、時々口をついて出でくださるお念佛のなかで、邪見な我のかたまりのような私自身に、ぽつぽつでも気づかさしていただけるのです。

その「みのりを聞く会」の会員の中から、「私たちは元気でこうして聞かしてもらつてお迎えして、いつしよに聞かしてもらおうではないか」という意見が出て、二年前から法を続けている会です。

この「別修報恩講」は、もと、「みのりを聞く会」がつとめた報恩講でした。  
「みのりを聞く会」という会は、もう九年も前(昭和四十八年発足)から仏教婦人会・仏教青年会の有志が、毎月二十五日の夜開法を続けている会です。  
その「みのりを聞く会」の会員の中から、「私も来れないお年寄りに、敬老のことろからお迎えして、いつしよに聞かしてもらおうではないか」という意見が出で、二年前から法を始めた報恩講です。

## 別修報恩講つとまる

住職

これから毎月一回。「寺報」を出してみようと思います。時々その機会はあるようでも、みんなの方に出会つて話すということが、なかなか出来ておりません。その埋め合せのつもりで一月に一回出させてもらいます。毎月の一日を発行日にします。

法話や寺の行事の案内や報告。あるいは「月月のことば」「月月のうた」なども載せようと思ひます。それから、仏教青年会のうごきや仏教婦人会の活動もお知らせしたいと思います。

また、お仏壇のかざり方、法事の正しいつとめかた。お葬式の正しいあり方など、作法のことなども書いてみたいと思います。みな様の知恵をかしてください。

第一、毎月配達するのに何かいい方法がないものでしょうか。教えてください。

何分ともよろしくご協力ください。

申込

十月十五日迄

会費  
送迎  
閉会　八時三〇分

七十歳以上の招待の方はその心配は一切しないで下さい。

男子会費　一、〇〇〇円  
女子会費　八〇〇円

「正信偈」のはなし（一回）

帰命無量寿如來

南無不可思議光

ひかりといのち　きわみなき

あみだほとけを　おがまなん

ひかりは智恵をあらわし、いのちは慈悲をあらわすといわれます。その智恵と慈悲の限りないものを阿弥陀仏というのです。だから悲智円満の仏とも申します。

その阿弥陀仏に帰依する心は、人間の知性の限界を知り、人間の愛情の限界を知つたときに限界を知らしめられます。お心が適當でよいのです。いいえ、南無阿弥陀仏に帰依することによって、はじめて人間の知性と愛情の限界を知らしめられると言つた方が適當でよい。

お念仏に会いお念仏を申さないかたは、人間の知性に限りがあり人間の愛情の末通らぬ事実を知ることができず、その無知無明がもとで、少し人より知識が勝れておればそれを誇り、人に愛情をそいでもすぐにお返しを求めたり恩をきせる気持ちになるのですが、無限の智恵と慈悲をもつみほげに帰依しお念仏に会わしてもらうものは、そのおのれを誇る心のみにくさに気づかされ、恩をきることのあさましさを知らされて、自然のうちに謙虚なやわらかな心にしていただくなのです。

それは、お念仏というお呼び声を通して、私この心のなかに、清淨真実のみ仏がはたらくべきだされこそです。



五日

「十六夜会総会」（この会は主に出石町内の婦人の聞法会です。毎月十日の夜例会があります。総会ではご法話のあと福引などがあつて心地のいい一日でした。但馬と丹波の仏教社年会の研修会が出

石町福成寺を会場にもたれました。参加者百七十人。本堂いっぱいの参会者

者で、接待に当つた出石組仏社連盟（山西茂之会長・亀井孝副会長）の人々

は終日てんてこまいでした。毎月つとまつてい

ますが、今月は住職がお参りしてお話をさしていただきました。

矢根の門徒講のお譲が永井貞雄さん宅でつとまりました。毎月つとまつてい

歩を踏み出しました。

兵庫教区の同朋（同和）運動推進協議会の教學委員として住職が教務所に出張しました。

二十一日　「別修報恩講」の相談のため、仏社

会の合同役員会を開きました。

二十三日　お彼岸会。ざつと本堂いっぱいのお参りでした。

二十五日　「みのりを聞く会」

## 九月のあゆみ

「じゅず」のおこりについては、余り確かなことはわかつていません。

仏教の起つたインドの国では、どうやら用いられてはいなかつたようです。（現在は、インド観光の土産物として売られていますが）その証拠に、インドの仏像でお珠数をかけているものは見かけません。

お珠数は、おそらく仏教が中国に伝わつてから、何かの必要から作られたものでしよう。何の必要かといえば、計算のためだつたと考えていいでしよう。

たとえば、觀念仏体といつて、禪定（静かな集中した心）の中に仏様のお姿を想う、な

どといふ修行をしたり。また、称念仮名といつて何千遍何万遍と仏様の名をとなえる修行をする時、呼吸をととのえるため、念佛の数をかぞえために必要な計算機だつたのです。

いま、珠数の玉の数は、百八つのもの、その半分の五十四のもの、更に半分の一七七のものが一般的です。そしてその数は百八つの煩惱に当たるとよく言われますが、これもおそらく後から考えた理屈でしょう。

仏法は理解にあらず、身に聞けと若き門主のおしえきびしき

われわれは

十五夜の月　うちあおぎ見る

かぐや姫　もの語りつつ　まな孫と

十五夜の月　うちあおぎ見る

仏壇のほおづき赤し　鳴らしたる

昔思ひぬ　母を思いぬ

## 十月の予定

兵庫教区教學振興委員会

「玉日会」（出石のお年寄り婦人の聞法会）の総会・追悼法要

兵庫教区同朋運動推進協議会

出石組「門徒推進者連続研修会」（善立寺）

十八日　別修報恩講

二十一・二日　全国教學委員研修会

二十五日　善立寺住職繼職奉告法要

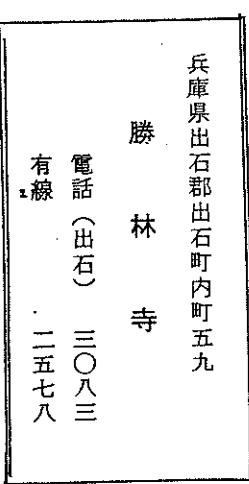
（十月の「みのりを聞く会」は「別修報恩講と合併します」）

## 珠　　念　　珠　　じ　　ゆ　　数

私は自分がお珠数をかけさしてもううとき、次のようなことを思っています。右手と左手。それそれの五本の指・みんなそれそれに働きが違うのの中では、一つになる。

「だれも来い」「みんな来い」（諸有衆生）「普共諸衆生」）とよんで下さる仏様のおよび声の中で、みんなはじめてこうして出会えるのだな」と思はしてもらうのです。

お珠数はだから仏様の光の輪をかたどつたものです。やわらかな顔、思いやりのあることばが私たちの顔や口から出るためには、おのれの意（こころ）に先だつて、まずお念仏を聞かしていただきねばなりません。



勝林寺

電話（出石）三〇八三  
有線　二五七八

お珠数はだから仏様の光の輪をかたどつたものです。地べたに置いたり、そまつにあつかわないようにしたいのです。